

経営特報

「売り上げを伸ばす」「手取りを増やす」

経営改善に役立つ情報をお届けします。

情報提供

Eメール keitei@koho-agrinews.co.jp
ファックス 03(5565)7262

地元の豆腐残さを活用

価格が安定 豚肉質上々

神奈川の白井農産

神奈川厚木市で母豚500頭、肥育豚5000頭を飼う白井農産は、10種類のエコフィードを毎月100ト給与している。インスタントラーメンやビスケットなどの残さが原料だ。飼料の中

で、エコフィードは重量換算で5割、6割。代表の白井欽一さん(49)は「価格変動の激しい穀物飼料と比べ、エコフィードの価格は安定しており経営計画が立てやすい。導入

前と比べ飼料代は平均で1割減った」と話す。生後1〜3カ月の子豚に給餌するエコフィードの量は月50ト。そのうち5トは、近隣の養豚農家3戸(1万7230頭)と共同購入する豆腐の乾燥飼料だ。子豚の発育時に必要なたんぱく質が多

い。豚の発育ステージに応じて、ビタミンやミネラルなどを20種類の飼料で補っている。

工場と連携
乾燥飼料に

共同購入の仕組みは、工場側で豆腐を製造するヤシマ食品藤沢第一工場(藤沢市)と連携してつくった。工場が廃棄していた豆腐を乾燥飼料加工し、農家に直接、引き渡す。流通業者が間にあらず、農家は安価で、新鮮なエコフィードを入手できる。

供給側にもメリットがある。工場では、豆腐のパック詰め作業で出る余りや規格外品の処理に毎月50万円の費用がかかっ

ていた。飼料化のため、乾燥機を2000万円で購入した。

工場から出る飼料は1週間5ト。4農家が毎週、順番に5ト分の豆腐飼料を受け取りに行く。

白井農産では5ト分を10日ほど使い切り、その後は大豆の油の搾りかすを1頭の豚を育てるのに協力した。

県畜産会の橋本聡統括畜産コンサルタントは、「狭い地域での取り組みで、輸送費も削減でき、1頭の豚を育てるのに仕上がる」という。

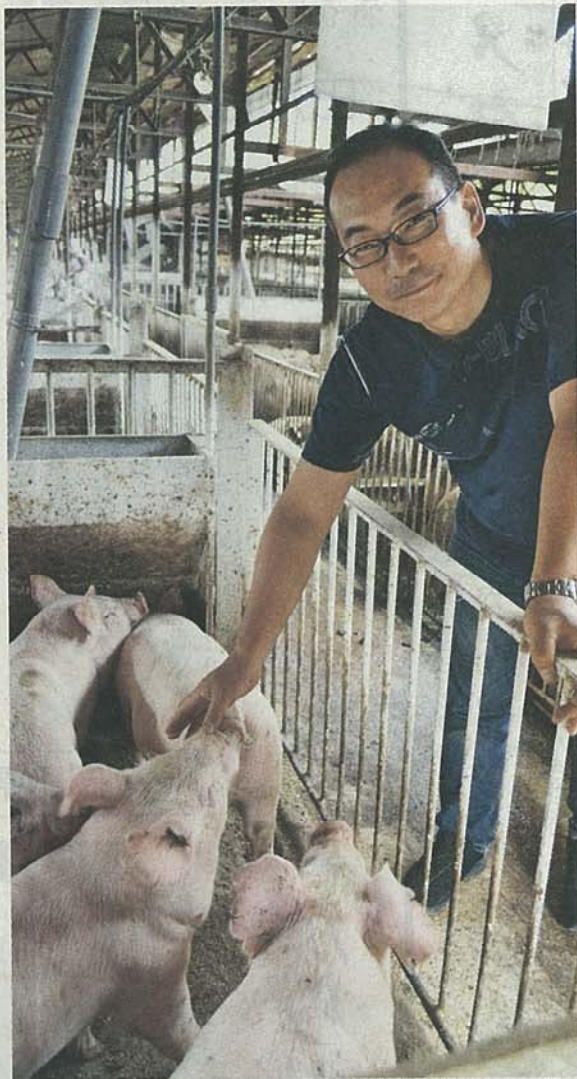
に6割が餌代なので、価格が少しでも下がれば農家の手取りを増やせる」と評価。エコフィード地域利用のモデル事例と位置付け、同様の取り組みを県内に広める考えだ。

白井さんは「米養バラ」を考えてエコフィードの配合割合を変え、発育時期に合わせて使い分けている。適正な組み合わせで締まりの良い肉質に仕上がる」という。

エコフィードの利用を推進するため、日本科学飼料協会は、一定の基準を満たした飼料を認証する「エコフィード認証制度」を09年度から始めた。55件が認証を受けている(6月1日現在)。

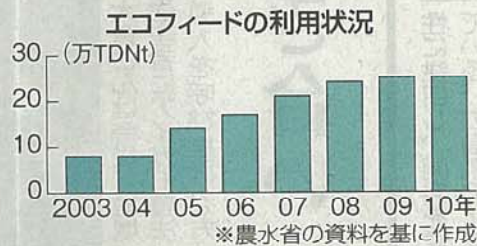
飼料価格の高騰を背景に、エコフィード(食品残さ利用飼料)を家畜の餌に利用する畜産農家が養豚を中心に増えている。価格が安定していることが最大の

メリットだ。地域内でエコフィードを生産、供給して飼料代を引き下げよう、肉質を高めてブランド化を進める事例も登場した。(入江紫織)



たんぱく質を豊富に含む豆腐の乾燥飼料を子豚に給与する白井さん(神奈川県厚木市で)

広がるエコフィード



利用は7年で3倍 農水省

エコフィードは、2007年に改正された食品の飼料化を優先することが明記され、利用に拍車がかかった。

農水省によると、10年度に全国で使われたエコフィードは25万TDN(可消化養分総量)で、03年の3倍以上に拡大した。20年度には50万TDNの利用を目標にする

。食品残さを飼料として利用するためには、飼料の保存性や家畜の嗜好性を高める加工処理が必要で、①乾燥②サイレージ調製③リキッドフィーディングの3技術がある。

同省によると、09年度の食品廃棄物などの年間発生量は約2272万

ト。そのうち60%が飼料として利用されている。1ト当たりの飼料の平均価格は、乾燥が24.8円、サイレージ調製が24.4円、リキッドフィーディングが6.7円。全事業者が対象とする家畜の種類(複数回答)は、豚が最も多く、169件、牛は117件、鶏は60件となっている。エコフィードの利用を推進するため、日本科学飼料協会は、一定の基準を満たした飼料を認証する「エコフィード認証制度」を09年度から始めた。55件が認証を受けている(6月1日現在)。